

よい授業の条件

「よい授業」とは何でしょう。私は「受け終わったあと、生徒が満足できた授業」だと思います。では、どうすればその「よい授業」ができるのか。その条件は3つあると思います。

まず第1に「適切な教材・指導内容があること」です。授業時間内に教えることが明確でなければもちろん意味がありません。また、ここで言う教材は生徒のレベルにあったものでなければ、高くても低くても十分な効果は得られません。その意味で教材の選定は慎重に行なわなければいけませんし、不足している部分は別途プリントを作る必要があります。

しかし、この条件は比較的整えやすい条件であり、この条件が満たされないような塾は確実に衰退するでしょう。

第2に「授業を行なう者の力量」です。いわゆる教師の質ですが、これは一言では言い尽くせません。ただ、私はここで最も必要なものは生徒を引きつける「話術」であると思います。少なくとも講師の学歴や知識だけではよい授業はできません。まさに演者としての才能です。

教師は生徒に対して「新しいこと」を伝えるわけです。この「新しいこと」をいかに印象的に伝えるか、これで生徒自身に「そうか、わかった」と感動させることが教師の醍醐味です。少なくとも眠くなるような授業や生徒の反応を気にしない授業をするような者は教壇に立つ資格はないと思います。

さて、第3の条件ですが、ここが最近崩れつつあります。実はよい授業をする条件は、教える側だけが用意するものではないのです。「授業を聞こうとする生徒」の存在です。聞く意志（理解しようと頭を使うこと）ができていなければ、第1・第2の条件が揃っていてもそれは単なる音でしかありません。まさに「馬の耳に念仏」の状態になってしまいます。繰り返しますが、「教師が授業をくふうする」ということだけで解決できる問題ではないのです。

授業とは一方的に受けるものではありません。同じ空間（教室）にいる以上、お互いのコミュニケーションによって授業は構成されているのです。その意味で聞き手である生徒も授業に真剣に「参加」しなければならないのです。

最近の変化は、この「授業」をまるで「テレビ番組でも見る」ような感覚で受けている生徒の増加にあると思います。一般的にテレビはリラックスしてみるものであり、それに対して自分の意志は伝えません。もちろん興味があれば注目もしますが、基本的に情報を整理してきっちり理解しようと真剣に向かい合うケースは希です。こうなったのも、まだ言葉も話せなかった子供の頃からテレビやビデオの映像や音声を子守歌に育った世代の弊害でしょうか。

私は生徒のいないスタジオでテレビカメラに向かって「講義（講演?）」をする事に魅力は感じません。かといって目の前にいる生徒に背を向けて黙々と「授業（ひとりごと）」を進める破廉恥な行為もできません。

私は「授業」をしたい。「よい授業」をすることが仕事と考えています。